

とび職を 「自分の仕事」にできた 喜びと誇り

とび職は工事現場の花形と呼ばれています。とび職がいなければ大規模工事は始まることも終わることもできないからです。山寛^{やまひろし}さんは、はじめからとび職を目指していたわけではありませんが、お話からはとび職を「自分の仕事」と呼べるようになったことへの喜びと誇りがうかがえます。

とび職(工) 山^{やま} 寛^{ひろし}さん



やま・ひろし ●昭和47年、東京都生まれ。父が塗装工であったことから、建築関係の仕事に感心を持つようになり、高校の建築科に進む。高校卒業後、向井建設株式会社に入社。入社以来25年あまり、とび職の仕事に従事。同社に人材開発部が発足すると同時に同部に移り、後進の指導に当たる。現在、同社人材開発部人材育成課係長。

求められた以上の仕事ができるようになって感じた手応え

——とび職というお仕事に就かれるまでの経緯を教えてください。

山 私父は塗装工の仕事をしています。私は中学生の夏休みなどに、父と一緒に現場へ行つて、その仕事を手伝っており、それがきっかけで建築という仕事に関心を持ち、高校の建築科に進みました。

将来も建築分野に進みたいと考えていましたが、当時は、とび職という仕事に就こうとは思っていませんでした。「とび職は工事現場の花形」という漠然としたイメージはありましたが、とび職が具体的にどんな仕事をするのかを知ったのは、向井建設に入社してからです。

——戸惑いのようなものではありませんでしたか。

山 高い場所での仕事には少し怖さを感じましたね。また、先輩のとび職の方々の雰囲気や言葉づかいになかなか慣れることができず、厳しい指導を受けて落ち込んでしまうこともありました。

——そうした状態から抜け出すまでにどのくらいかかりましたか。

山 だいたい4〜5年くらいでしょうか。その頃から仕事を安全に効率よく進めるために、自分なりの工夫を提案し、それを先輩たちが受け入れてくれるようになりました。それがきっかけで、とび職という仕事の面白さを感じるようになりました。それまでは先輩から言われたことを、言われた通りにただこなすだけでしたから……。

自分の工夫で先輩が求める以上のことができるようになったと思えるようになり、仕事に対する手応えも感じるようになりました。

工事現場はとびに始まりとびに終わる

——とび職という仕事は具体的にどんなことをするのか、一般の人にはよくわからないかもしれません。

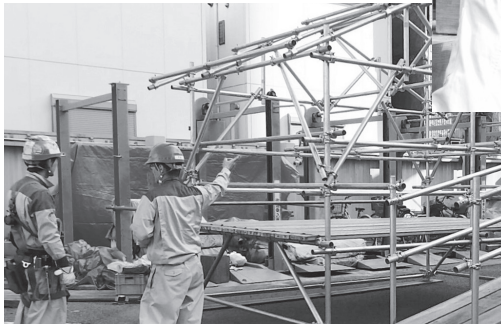
山 とび職の仕事の基本は、大規模なビルなどの建設工事現場で足場を組み立て、いろいろな職種の人たち

が、それぞれの仕事を安全に効率よくできるようにすることです。足場はさまざまな職種のたくさんの職人さんたちが利用します。特定の職種の人だけが使いやすいというのでは、足場としての条件が満たされていません。

さらに職種に応じて足場を少しずつ組み替える「盛り替え」という作業が発生します。そのため、作業が始まる前からいろいろな状況を考える必要があります。工事現場におけるさまざまな仕事の基礎づくりと、それに携わる人たちの安全確保が足場組立の仕事と言えるでしょう。また「鉄骨とび」という、巨大な鉄骨を現場に搬入し、クレーンでそれを吊り上げ、所定の位置に柱や梁として組み込んでいく仕事もあります。

そのほか、安全確保のために工事現場の周囲を塀で囲む「仮囲い」をするのも、われわれの仕事です。仮囲いや、外部から見える足場は「現場の顔」とも言われ、一般の人々のその建築物に対する印象の良し悪しに大きな影響を与えます。実はきれいな「仮囲い」でないこと、その工事現場の中もきれいでないことが多いと言われていて、とび職はこういうところにも注意を払わなくてはなりません。さらに工事の最後「仮囲い」を解体して工事が終わることから、工事現場の仕事は「とびに始まり、とびに終わる」と言われ

技能五輪全国大会の出場選手を教育する山さん。
一人ひとりの習熟度を見極め、目標を与える。



実際に仕事をするときは、安全を確保するためさまざまな装備を装着する。そのためにある程度の体力は必要だが、山さんは「体力は後からついてくる」と語る。



ることもあります。

——そうしたお仕事の中で、どんなときに喜びややりがいを感じますか。

山 長い時間をかけて大きなものをつくり上げることに携わっているんだ、ここで自分は重要な役割を担っているんだという思いがありますね。それが喜びであり、やりがいでもあります。それにとび職の仕事はチームプレーであり、1人だけでは絶対にできないものです。そうした中で培った仲間意識は私の財産であり、先輩・後輩を問わず困ったときにはすぐに助けてくれます。無事に仕事を終えた後に、そうした仲間からかけられるねぎらいの言葉を聞くと、大きな充足感が込み上げてきますね。

また自分がとび職として携わった建物が完成し、家族と一緒に訪れて食事をしたときなどはとてもうれしくなりますし、ちよつと誇らしげな気持ちにもなりますね。

**だれも奪うことができない
自分に蓄積された「腕」**

——現在は、人材開発部に所属して後進の教育を担当されていますね。

山 私は人材開発部が発足すると同時に異動しました。現在、私の大きな仕事は新入社員の教育です。4月に新入社員たちを静岡県富士宮市にある全国規模の職業訓練施設「富士教育訓練センター」で、社会人としての心構えや

マナー、必要な技能などを集中的に教育しています。

新入社員のほとんどは高卒者で、現場経験は全くありません。いわばゼロからのスタートです。

教育を進めていくと、同じ新入社員でも習熟度にばらつきが出てきます。そんなとき私が心がけているのは、習熟が遅れている新入社員に合わせて、みんながボトムアップできるようにすることです。習熟が遅れている者はなかなか自分で目標を設定できません。そんな新入社員には達成しやすい目標を与え、繰り返し訓練させます。そして彼がどれだけ努力したかを周囲にアピールするのです。それがやがて、彼の自信になっていくはずだと確信しています。

——御社には「伝説のとび」と言われた国重徳美さんがいらしていましたね。国重さんから教わったことはありますか。

山 新人のころ、同じ現場で国重さんの仕事ぶりを遠くから見たことがあります。私にとつては神にも近い存在で、とてもあんなふうにはなれないと思っていました。

私が国重さんと直接かわるようになったのは、亡くなる数年前からです。国重さんが、新入社員の教育をされていたのですが、後に私がその担当になり、教育で疑問に思ったところは何度か電話で尋ねました。また国重さんが、当社の技能五輪全国大会の出場選手たちを指導する様子を傍らで見ている

どういうところに重点を置いていたのかも学ばせてもらいました。たいへん厳しい方でしたが、寝食を惜しまず若者に向き合う姿から、後進に対する深い愛情を感じましたね。

——とび職を目指す若者へのアドバイスをお願いします。

山 とび職という仕事には限りがなく、絶えず勉強して腕を磨かなければなりません。でもそうした努力の中で、知識や技能が自分の中に蓄積されていく。私にとび職の仕事に就いてよかったと思うのは、その知識と技能は個人の中に蓄積されていて、誰もそれを奪うことはできないということです。まさに「自分の技能」であり、「自分の仕事」なのです。私のこれまでの職業人生の中で、そう実感できたことが一番の幸せと言えらると思います。とび職を目指す若い人たちにはそのことを伝えたいと思います。

最近の若者は、いったん仕事に就いても短期間で離職してしまったり、少しづつと、その道をあきらめてしまいう傾向があるように思います。私は新入社員を教育するうえで、「つまづくことの大切さや、失敗から学ぶことがいかに大切か」を話しています。

また、仕事を選ぶときに少しでも好きな部分を見つけるようにすると、長続きするかもしれません。そうすると、その仕事の中により大きい楽しさや、やりがいを見つけることができるのではないかと思います。